

（分担）研究報告書

研究課題：消化管を主座とする好酸球性炎症症候群の診断治療法開発 疫学、病態解明に関する研究

研究分担者： 松井敏幸 福岡大学筑紫病院消化器内科 教授

共同研究者： 石川智士・二宮風夫 福岡大学筑紫病院消化器内科

研究要旨：(1)2012年に診断基準が確定した。その後、厚労省の特定疾患に認定され、その診断基準も確定した。(2)今後は診断基準の改訂を進め、さらに治療ガイドラインを策定する事業が立ち上がった。作成委員あるいはシステムチックレビュー委員に任命され、その作業が始まった。(3)臨床個人票に基づくデータベース構築も必要となる。(4)好酸球性食道炎・好酸球性胃腸炎における疾患関連性遺伝子および統合オミックス解析についても症例を登録している。

特に、診療ガイドラインと重症度についてわが国の基準を策定することが当面重要である。

1 研究目的

著者らは、これまでに炎症性腸疾患の診断基準、鑑別診断に関する研究を続けてきた。その成果は、我が国におけるIBD診断基準の作成につながりその改訂も進め、公表してきた。その内容は我が国におけるガイドラインとしても取り上げられてきた。また、早期クローン病の診断や好酸球性腸炎との鑑別に関しても研究を進めてきた。

2 研究方法

(1)2012年に診断基準が確定した。その後、厚労省の特定疾患に認定され、その診断基準も確定した。

(2)今後は診断基準の改訂を進める。さらに治療ガイドラインを策定する事業が立ち上がった。作成委員あるいはシステムチックレビュー委員に任命され、その作業が始まった。

(3)臨床個人票に基づくデータベース構築も必要となる。

(4)好酸球性食道炎・好酸球性胃腸炎における疾患関連性遺伝子および統合オミックス解析についても京都大学に症例を登録している。

（倫理面への配慮）

総説や原著論文であり、患者情報は含まれていない。

3 研究結果

(1)2014年に厚労省の特定疾患に認定され、その診断基準も確定した。

(2)今後は診断基準の改訂を進める。特に、消化管の正常例における好酸球浸潤細胞の数を確定させることが重要であろう。さらに治療ガイドラインを策定する事業が立ち上がった。臨床上の疑問（CQ）が確定しつ

つある。また、厚労省の難治性疾患ホームページへの疾患紹介の記載、好酸球性消化管疾患診療ガイドの出版（2014、南江堂）など本症の正しい理解を進めるため、広報やガイドラインが整備されつつある。

(3)臨床個人票に基づくデータベース構築も必要となる。多数例を登録して疾患の臨床像を解析する。

(4)好酸球性食道炎・好酸球性胃腸炎における疾患関連性遺伝子および統合オミックス解析についても症例を登録している。

4 考察

好酸球性消化管疾患は海外でも様々な呼称が用いられており、我が国で呼称が統一された意義は大きい。その病態も我が国と海外で差があるように見える。更なる研究の進歩と調査が必要であり、重症例に対する治療法の確立も望まれる。

5 評価

1) 達成度について

診断基準が作成され、供評された。更なる疫学研究の第一歩が始まった。

2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について

我が国の診断基準を英文誌に掲載し、海外に発信した。国内の臨床家にも周知すべく臨床系の疾患ガイドに特集を掲載した。

3) 今後の展望について

公表された診断基準により病態解明が進むものと思われる。

4) 研究内容の効率性について

我が国における先進的な成果を一堂に集めたことにより認知度が高まった。

6 結論

海外で多く研究されてきた好酸球性消化管疾患は我が国にも存在する。好酸球性消化管疾患は海外でも様々な呼称が用いられており、我が国で呼称が統一され特定疾患にも取り上げられた。今後の病態解明と治療法探策研究が必要である。

7 研究発表

1. 論文発表

1, Tsurumi K, Matsui T, Hirai F, Takatsu N, Yano Y, Hisabe T, Sato Y, Beppu T, Fujiwara S, Ishikawa S, Matsushima Y, Okado Y, Ono Y, Yoshizawa N, Nagahama T, Takaki Y, Yao K, Iwashita A.

論文名: Incidence, clinical characteristics, long-term course, and comparison of progressive and non-progressive cases of aphthous-type Crohn's disease: a single-center cohort study. *Digestion*. 2013; 87: 262-8

2, Takahashi H, Matsui T, Hisabe T, Hirai F, Takatsu N, Tsurumi K, Kanemitsu T, Sato Y, Kinjo K, Yano Y, Takaki Y, Nagahama T, Yao K, Washio M. Second peak in the distribution of age at onset of ulcerative colitis in relation to smoking cessation. *J Gastroenterol Hepatol*.29(8) : 1603-1608 , 2014.

3, Hirai F, Beppu T, Takatsu N, Yano Y, Ninomiya K, Ono Y, Hisabe T, Matsui T. Long-term outcome of endoscopic balloon dilation for small bowel strictures in patients with Crohn's disease. *Dig Endosc* 26(4): 545-551, 2014.

4, Matsui T, Matsumoto T, Aoyagi K: Endoscopy in the diagnosis of small intestine diseases. Springer,1-283, 2014.

5, Hisabe T, Hirai F, Matsui T, Watanabe M. Evaluation of diagnostic criteria

for Crohn's disease in Japan. *J Gastroenterol*. 49: 93-99, 2014.

6, Ueno F, Matsui T, Matsumoto T, Matsuo K, Watanabe M, Hibi T. Evidence-based clinical practice guidelines for Crohn's disease, integrated with formal consensus of experts in Japan. *J Gastroenterol*. 48: 31-72, 2013

7, Hirai F, Takatsu N, Yano Y, Satou Y, Takahashi H, Ishikawa S, Tsurumi K, Hisabe T, Matsui T. Impact of CYP3A5 genetic polymorphisms on the pharmacokinetics and short-term remission in patients with ulcerative colitis treated with tacrolimus. *J Gastroenterol Hepatol*. 29: 60-6, 2014

8, Beppu T, Ono Y, Matsui T, Hirai F, Yano Y, Takatsu N, Ninomiya K, Tsurumi K, Sato Y, Takahashi H, Okado Y, Koga A, Kinjo K, Nagahama T, Hisabe T, Takaki Y, Yao K. Mucosal healing of ileal lesions is associated with long-term clinical remission after infliximab maintenance treatment in patients with Crohn's disease. *Dig Endosc*.27(1):73-81,2015

9, 石川智士、二宮風夫、松井敏幸、平井郁仁。診断・鑑別。好酸球性消化管疾患診療ガイド、南江堂 2014、pp51-55, pp60-63

8 知的所有権の出願・取得状況(予定を含む)

1 特許取得

なし

2 実用新案登録

なし

3 その他

なし